すいば ほっこり町 利(み)知(ち)標(しるべ)。

第四十一弾
～ツクモさんの"平成の仏師"編～

昭和四十二年、十五歳の少年が仏師を目指して京都に来た。
修業を積んだ少年はやがて大人になり、
ひとりの仏師として
今も京都で仏像を彫刻している。
三重県は伊勢出身の彼にとって子ども時代の"すいば"は京都にはない。
だが、日々散策する京の町そのものが新しい"すいば"になりつつある。

ライター・三村 渓／カメラマン・小笠原 圭彦

東大寺南門には「あ・うん」の一対をなす大きな像がある。有名な金剛力士像だ。ひとつは快慶、もうひとつは運慶の作といわれる。ふしくれだった筋肉や風にひるがえるような着衣の様子をみれば、昔の仏師もずいぶんと個性的な表現をこころみたことがわかる。

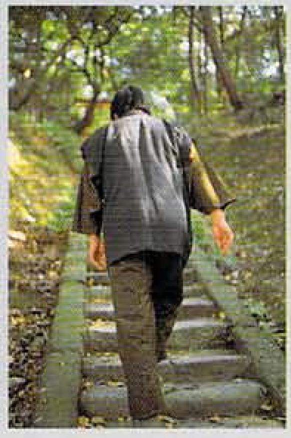
運慶は、鎌倉時代の彫刻界を支配した人物だ。彼が率いた七条仏所は当時全国から造仏の注文を受けた。運慶が出現するまで、院尊・明円がそれぞれ院派、円派を開いて大祖・定朝の様式を固く守り仏師界で大派閥を形成していた。だが、運慶のおかげですっかり仏像製作の注文が取れなくなった。

実は定朝の直系子孫だった運慶が、皮肉にも院派・円派を圧倒したのだが、それには鎌倉幕府の政治力が背景にあった。平安貴族が好んだおとなしい定朝様式の仏像より、奔放で個性的な運慶の作風が武士たちに好まれた。だが、そうした運慶の作風がいつまでも継承されつづけたわけではない。芸術的個性という点で運慶の作風は強い光彩を放つが、後世の仏師により強くアピールしたのは穏やかで静謐な様式だったようだ。

京都市左京区上阿達町。

ほそい路地が交錯する静かな住宅地の一角。ちかごろではめずらしい長屋風の建物に、今村九十九氏の住まいがある。現在、定朝の仏像に強く魅かれているという今村氏は三重県伊勢市の出身。中学を卒業後、松久明琳、宗琳氏に師事して以来、今日ま

すいば ほっこり町 未知標。



今村氏の散策コース。吉田山から哲学の道周辺がお気に入り。特に悩みごとや思索に行き詰まったときは、この辺りを歩くのだという。毎回、歩くたびに違う町の表情を発見するのが楽しみなのだそうだ。

で数多くの仏像彫刻を手がけてきた仏師だ。

　仕事場に座る今村氏を前に、先の運慶の話をもちかけてみた。仏師といえども彫刻という創造の世界で仕事をする身である。『仏の三十二相』や『印のむすび方』など、仏さまには規則が多く、情熱のおもむくまま自由奔放な姿態を創作することは固く禁じられているそうだ。だが運慶のような?例もある。果たして現代の仏師に個性は許されないのだろうか。規則ばかりでフラストレーションはたまらないのだろうか。

「仏師とは、芸術家でもなく職人でもなく、としか言いようのない存在なんですよ。芸術家は自分の個性や創造性をそのまま作品にぶつけられますよね。でも、我々はちがうんです。修業の最初では個性を消せとまでいわれる。仏像は自分の作品でありながら自分の作品でない。もし、仏さんに仏師の我が現れたら、ごく一部の人にしかウケないものになってしまう。仏さん拝む人はいろいろでしょ?信心深い人、慾どおしいコト拝む人、みんなの願いや期待に応えられるだけの表情と姿を兼ね備えていないとだめなんです。そのさまざまな思いに応える仏像を彫刻しなければならないんです。

　それに、我々は宗派にとらわれず、どんな仏像も彫刻しなければならない。自我を発する前に、仏師は一生をかけて根源的な仏の教えや哲学性を追及していかなければならないのです」

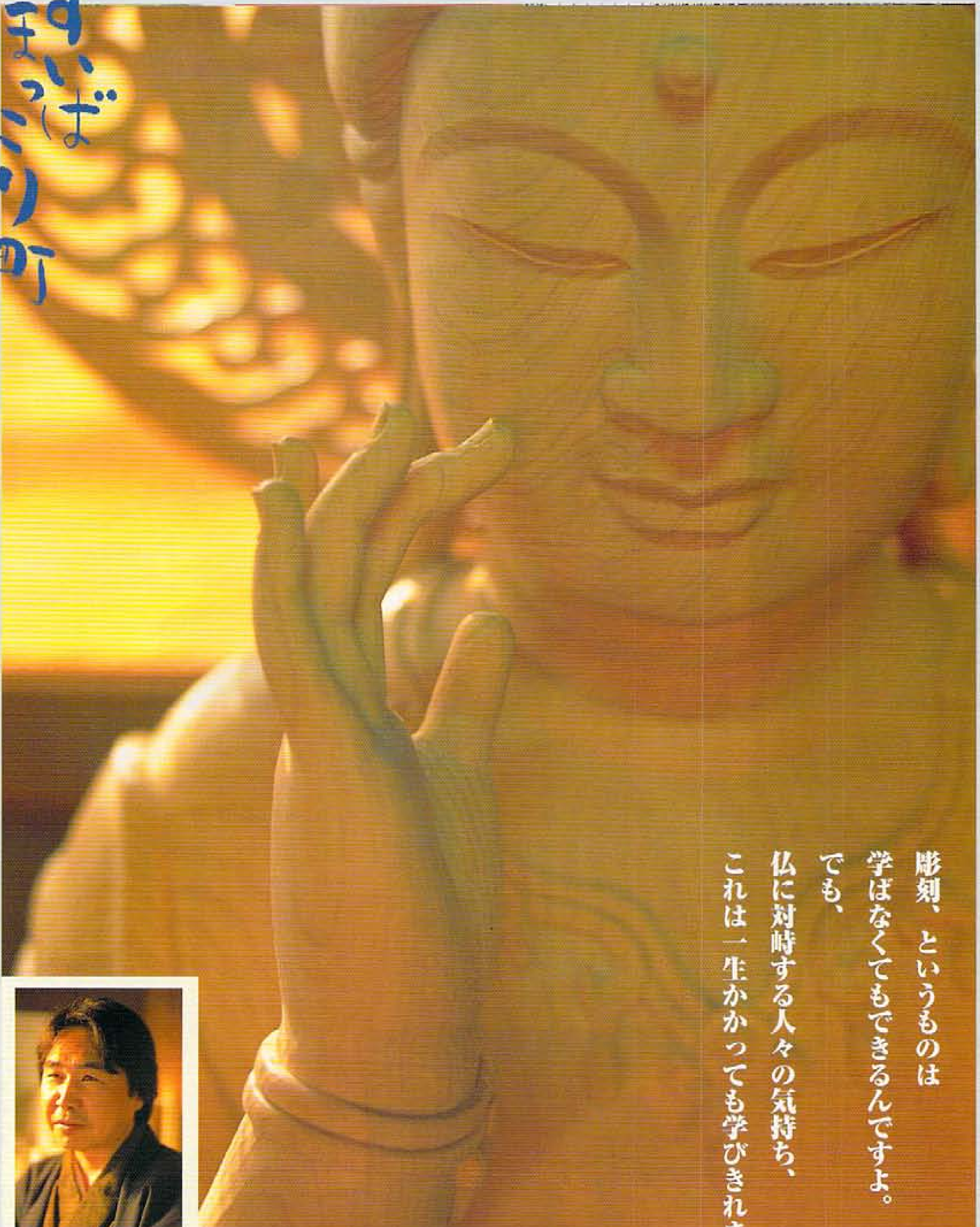
　当然といえば当然の答えだ。だが、淡々とそれを云うことのできる今村氏の自負と信念にはいささか畏敬の念を覚えた。さすがにプロである。自分が抱える芸術性(や個性の発露)へのこだわりと決別することは容易ではない、などと青クサイことは云わない。この壁を乗り越えられてこそ、一流と呼ばれる資格があるのだ。その気持ちが伝わったのだろうか。柔和な目を細めると、今村氏は遠い日を回想するかのように言葉を継いだ。

「でもね。個性というものはどうしても出るものですねぇ。かつては、やはり自分で解釈した仏像を彫刻したこともあるんですよ。これがそうですが、『炎の中に不動を見た!』、と力んで製作しました。自分がこれまで修業し、身につけてきたものを壊してみたい、という思いに捕らわれた時期です。自分の技術をみてほしい、自分の解釈をわかってほしい、というスケベ心があったんでしょうなぁ」

　目の前に出された彫像は、それまで紹介された今村氏の作品とはおよそ雰囲気の違うものだった。繊細で緻密な風情はどこにもない。ただ、仏師がつくる仏像としては失格かも知れないが、観賞するだけなら間違いなくこちらの方が面白かった。では平成に生きる仏師、今村氏にとって、今の時代に求められる仏像とはどんなものなのだろう。

「平成の仏像、というのはにっこり微笑む仏像でしょうか。きれいでにっこりしたものがうけるようです。どうも私の目からみると、だんだん仏さまは優しくうすっぺらになってきている気もします。本来、仏に手をあわせながら自分自身も精進修業するべきだと思うのですけれど。それが、現実にはあまやかしてくれるだけの仏さまがもてはやされる……これはあくまで私見ですが、仏

すいば ほっこり町 刻み知標。



彫刻、というものは
学ばなくてもできるんですよ。
でも、
仏に対峙する人々の気持ち、
これは一生かかっても学びきれません。

の笑みの中には厳しさや時には悲しみがあってしかるべきだと思うのですよ」

今村氏は幼ないころから古美術に強い興味を覚えたそうだ。どういうわけか、古い書画骨董を眺めるのが好きな少年だった。そして、誰に教えられるでもなく、彫刻刀を片手に木を彫りはじめたという。展覧会などで入賞し、地元では〝彫刻少年〟としても名を馳せた。師の松久明琳氏が、そんな氏の噂をどこで聴きつけたのかはわからない。ただ、松久氏が少年の家を訪れ弟子入りをすすめたとき、今村少年はコクリとうなずいたという。

「彫刻、というものは学ばなくてもできるんですよ。でも、仏に対峙する人々の気持ち、これは一生かかっても学び切れませんね」

氏はそういうと、散歩にでましょう、と家の扉をあけた。取材のあとは、吉田神社付近を散策する約束になっていたのである。

プロフィール
今村　九十九
昭和二十六年生まれ。三重県伊勢市出身。昭和四十二年京都佛像彫刻研究所（現在の大仏師松久宗琳佛所）に内弟子として入門。大仏師松久明琳氏・宗琳氏に師事する。昭和五十二年に独立、以来、全国の寺院・在家の佛像を多数製作。仏師として現在に至る。昭和五十七年・平成七年にそれぞれ姫路、神戸にて個展を開催。宗教芸術院本部講師・朝日カルチャー神戸講師・姫路美術協会会員。白門会主宰。